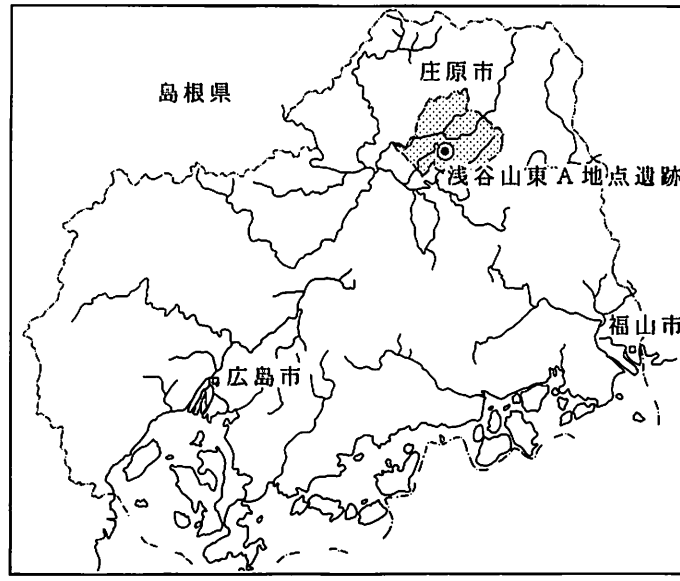
広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 85 集

浅谷山東A地点遺跡

1990

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

浅谷山東A地点遺跡



1990

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

調 査 区 全 景（南東から）

例　　言

1. 本書は，平成元（1989）年8月28日から10月27日にかけて実施した庄原市七塚町の国営備北丘陵公園第1期事業に係る浅谷山東A地点遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は，建設省中国地方建設局国営備北丘陵公園工事事務所から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 現地の調査は植田　広・藤原彰子が行い，出土遺物の整理，復元，写真撮影，実測，図面の製図及び本書の執筆，編集は植田が行った。
4. 本書に使用した遺構の表示は，ＳＢ：竪穴住居跡・掘立柱建物跡である。
5. 本書に用いた方位は第1図を除きすべて磁北である。
6. 第1図は，建設省国土地理院発行の1：50,000の地形図（三次・庄原・上下・上布野）を使用した。
7. 図版と挿図の遺物番号は同一である。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに …… (1)

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境 …… (3)

第Ⅲ章　調査の概要 …… (10)

第Ⅳ章　遺構と遺物 …… (12)

1. 竪穴住居跡 …… (12)

2. 掘立柱建物跡 …… (17)

第Ⅴ章　おわりに …… (19)

巻　頭　図　版

図版　調査区全景（南東から）

図　版　目　次

図版１①　遺跡遠景（北から）
　　②　調査前近景（東から）
図版２①　調査区全景（東から）
　　②　同上（南東から）
図版３①　ＳＢ１調査前（南東から）
　　②　同炉跡（北西から）
図版４①　ＳＢ１遺物出土状況（北東から）
　　②　同調査後（東から）
図版５①　ＳＢ２遺物出土状況（南東から）
　　②　同調査後（東から）
図版６①　ＳＢ３調査後（南から）
　　②　ＳＢ４～6調査後（南西から）
図版７①　ＳＢ７調査後（南西から）
　　②　ＳＢ3～7作業風景（南東から）
図版８　出土遺物

挿　図　・　表　目　次

第１図　周辺遺跡分布図（1：50,000）……（5）
第２図　国営備北丘陵公園予定地内遺跡分布図（1：10,000）……（7）
第３図　遺跡周辺地形図（1：5,000）……（8）
第４図　調査区周辺地形図（1：2,000）……（10）
第５図　遺構配置図（1：200）……（11）
第６図　ＳＢ１実測図（1：60）……（13）
第７図　ＳＢ１出土土器実測図（1：3）……（14）
第８図　ＳＢ２実測図（1：60）……（16）
第９図　ＳＢ２出土土器実測図（1：3）……（17）
第10図　ＳＢ２出土鉄器実測図（1：2）……（17）
第11図　ＳＢ４Ｐ１出土土器拓影（1：3）……（18）
第12図　ＳＢ３～７実測図（1：60）……（折込み）
表　新たに確認した国営備北丘陵公園予定地内遺跡地名表……（9）

第Ⅰ章　はじめに

浅谷山東Ａ地点遺跡の発掘調査は，国営備北丘陵公園第１期事業に伴うものである。本事業は，国民の余暇時間の増大に対応し，スポーツやレクリエーション，教養文化活動を行う場としての総合リゾート施設を整備し，緑豊かな自然環境の中で，中国地方の歴史や文化にふれ，周辺とのつながりや地域振興を図ることを狙いとして計画された。

建設省中国地方建設局国営備北丘陵公園工事事務所（以下「建設省」という。）は，国営備北丘陵公園整備事業区域340haのうち，湖水，圃場等を除く309haについて，昭和61（1986）年11月13日（第１期事業区域分129ha）及び昭和63年５月11日（第２期事業区域分180ha）に広島県教育委員会（以下「県教委」という。）に対し，埋蔵文化財の有無ならびにその取扱いについて協議した。これを受けて県教委は現地踏査を実施し，第１期事業区域分については，昭和62年７月14日及び同年11月21日に古墳13基，古墓４基と試掘調査の必要な箇所が21か所ある旨を回答した。次いで，昭和63年７月４日及び平成元（1989）年２月15日に，第２期事業区域分について古墳６基，古墓１基と試掘調査の必要な箇所が14か所ある旨を回答した。以上本事業区域全体で確認した埋蔵文化財は，古墳19基，古墓５基及び要試掘調査箇所35か所である。そして，昭和62年９月からは，要試掘調査区域について県教委が試掘調査を順次実施しており，平成元年度までに６か所の試掘調査が終了した。その結果，新たに浅谷山東Ａ地点遺跡ほか８か所約4.2haの遺跡が確認されている。

浅谷山東Ａ地点遺跡は，昭和63年11月に試掘調査が実施され，約10,600㎡の遺跡の範囲が確認された。そして，平成元年度に防災調整池施工のための採取土を確保する目的で，浅谷山東Ａ地点遺跡の中央部1,000㎡がその採取地として計画されたため，県教委は建設省と協議を重ねたが，遺跡の現状保存は困難であるとの結論に達した。平成元年２月20日，県教委は建設省に対し事前に発掘調査を行い記録保存の措置を図るよう通知した。平成元年１月27日，建設省は財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）に調査を依頼した。同年８月18日，センターは建設省と委託契約を結び，８月28日から10月27日までの約２か月間，発掘調査を実施した。

また，11月18日に庄原市教育委員会と共催で遺跡見学会を開催したところ，約80名の参加者があった。

最後に，発掘調査にあたっては広島県教育委員会の御指導を得るとともに，建設省中国地方建設局国営備北丘陵公園工事事務所，庄原市教育委員会，広島県立歴史民俗資料館及

び地元住民の方々の御協力をいただいた。記して謝意を表したい。

作 業 風 景

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

庄原市は，広島県の北東部に位置し，標高1,000m以上の中国脊梁山地の南側に当たり，庄原盆地を中心に栄えてきた県北第二の都市である。古来，庄原盆地は，陰陽の中間に位置し，交通上の要衝として発展してきた。

庄原盆地の周辺には，北に標高400～600mの吉備高原面に形成された山塊が連なり，西には隣接して三次盆地があり，南は標高300m前後の比較的なだらかな低丘陵群が広がっている。地理的には市域の中央部を西城川（江の川水系）が東西に流れ，盆地の北側には西城川の支流である川北川が南に流れ，盆地の南側には標高300m前後で谷水田との比高差20～70mの低丘陵が広がっており，その丘陵をぬうように馬洗川の支流である本村川や国兼川が流れている。遺跡が立地する丘陵は，庄原市街地から南西へ約2.5kmの七塚町と上原町の境界付近に位置する標高約280mの低丘陵である。また，丘陵の両側には細く延びた谷が樹枝状に見られ，水田となっている。ところで庄原盆地は，各時代の遺跡が集中している地域でもある。今までは，特に古墳の存在が目立ち，集落跡関係の遺跡についての研究は立ち遅れ気味の傾向にあったが，近年，諸開発に伴って多くの遺跡が調査され，資料も増加してきた。

次に，本地域における歴史的環境について時代を追って紹介していくことにする。

旧石器時代の遺跡は，安山岩製の槍先形尖頭器が出土した新庄町小和田遺跡[(1)]と石英質の剥片，石核が出土した高町佐田谷墳墓群[(2)]がある。若干の資料からその全容を把握する事はできないが，この時代からすでに当地に人々が生活していた事が窺える。

縄文時代の遺跡は，早期の土器が出土した新庄町和田原遺跡[(3)]，川西町笹淵遺跡や前期から中期の土器が出土した本村町大原1号遺跡[(4)]などがある。

弥生時代になると，遺跡の数が急激に増加し，これまで50箇所を越える遺跡が確認されている。前期の遺跡は少なく，若干の遺物が土壙内から出土した和田原遺跡，新庄町西山遺跡[(5)]がある。中期の遺跡は，住居跡が確認された大原1号遺跡，山内町隠地上組遺跡[(6)]，濁川町戸の丸山製鉄遺跡[(7)]や和田原遺跡などが調査されており，該期の住居構造の一端を知ることができる。また，中期の土器が出土した遺跡としては峰田町大仙遺跡，七塚町蜂原遺跡がある。後期については，西山遺跡で住居跡が検出されている。

一方，該期の墳墓としては佐田谷墳墓群や山内町田尻山第1号方形墓[(8)]が調査されている。両墳墓ともに調査の結果，四隅突出型墳墓であることが判明した。また，多量の土器が供献されていた。この時期の墳墓の調査例はまだ少ないが，当時の墓制や文化を考える

うえで質，量ともに重要な資料をもたらしている。

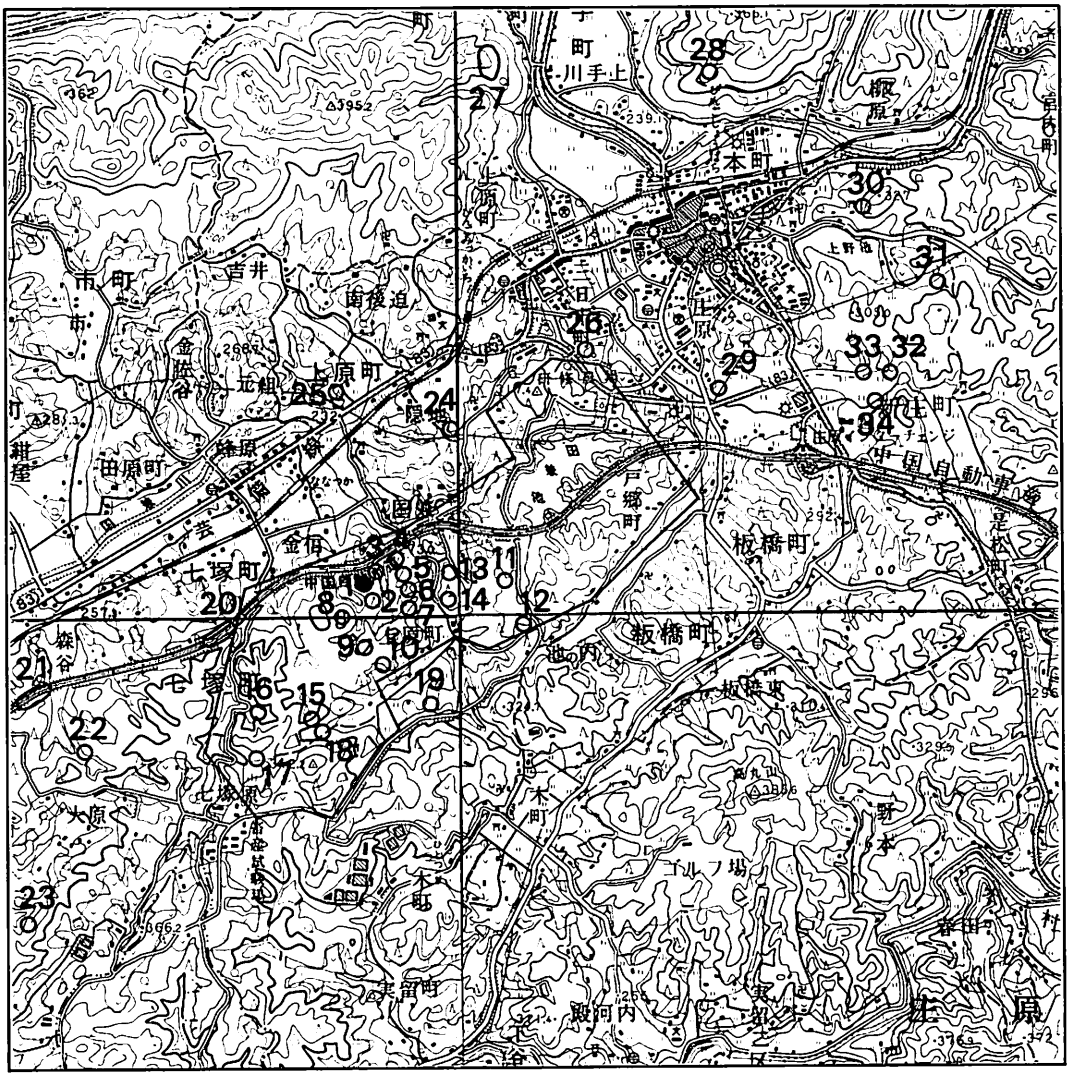
古墳時代になると遺跡の数も更に増加するが，その大半は古墳で，現在のところ約500基が確認されている。当地域では4世紀代の古墳は確認されておらず，5世紀に入ってから築造されたものがほとんどである。集落跡は，古墳に比べると確認されている遺跡数が少なく，新庄町永宗遺跡[9]，小和田遺跡，西山遺跡，三日市町大成遺跡[10]，本村町鍬寄遺跡[11]，牛乗遺跡[12]，川西町境ケ谷遺跡[13]などがあげられる。永宗遺跡1号住居跡からは，山陰系の複合口縁を持つ壺や甑形土器などの大型品が出土しており，この時期には，山陰地方との交流も頻繁に行われていたことが予想される。また，牛乗遺跡，境ケ谷遺跡，大成遺跡からは，鉄滓（てっさい）や鞴羽口（ふいごはぐち）が出土しており，鉄生産が考えられる。

古墳の分布域は，西城川，本村川，国兼川流域の丘陵上を中心に広がっている。西城川流域は，掛田町旧寺第1号古墳[14]，上原町甲山古墳[15]，小用町矢崎古墳[16]，広政第2号古墳など県内でも最も前方後円墳が密集する地域である。本村川流域は，本村町月貞寺古墳群[17]，峰田町発展古墳群[18]などがあり，円墳がグループを構成する。古墳時代終末期になると，本村町国重第1号古墳[19]，大原第4号古墳，高町篠津原第3号古墳[20]などの小規模な円墳になる。国兼川流域では，田尻山古墳群，大唱山古墳群[21]といった，5世紀後半～6世紀前半の時期に築かれた古墳群がみられる。

古代の遺跡では，宮内町神福寺跡で白鳳期の瓦が出土し，上原町亀井尻瓦窯跡[22]では奈良時代の平窯が検出されている。

中近世は，平和町向城跡，高町雲井城跡[23]・篠津原遺跡群，本郷町甲山城跡などの山内首藤氏の居城跡（山城）や居館跡がある。他に本郷町鈴神城跡，峰田町青岳山城跡があり，後者は，のちに山内氏の支配下になる赤川氏の居城跡である。

国営備北丘陵公園予定地内では，弥生時代から中近世までの遺跡が確認されている。弥生時代の遺跡は，七塚町浅谷山東A地点遺跡，上原町清水1号遺跡がある。古墳時代は，集落跡の上原町岡山A地点遺跡，浅谷山東A地点遺跡，同B地点遺跡，同C地点遺跡，清水1号遺跡，同2号遺跡，上原町北山A地点遺跡，同B地点遺跡が確認されており，近接した丘陵上に分布している。墳墓は，上原町岡山B地点遺跡で確認されている。古墳は，七塚町浅谷山古墳群（5基），上原町馬立古墳群（2基），土地森古墳群（5基），北山古墳，熊野清水山古墳群（3基），渦田山南古墳群（2基），渦田山北古墳が確認されており，いずれも円墳で規模は径10.0～15.5m程度である。中近世の古墓は，上原町大日向古墓，浄光寺古墓群（4基）があり，いずれも円形で，規模は径4.0～7.5mである。



第 1 図 周 辺 遺 跡 分 布 図 （1：50,000，枠内は公園予定地）

1. 浅谷山東Ａ地点遺跡　2. 浅谷山東Ｂ地点遺跡　3. 浅谷山東Ｃ地点遺跡

4. 岡山Ａ地点遺跡　5. 岡山Ｂ地点遺跡　6. 清水１号遺跡　7. 清水２号遺跡

8. 浅谷山古墳群　9. 馬立古墳群　10. 浄光寺古墓群　11. 土地森古墳群

12. 北山古墳　13. 北山Ａ地点遺跡　14. 北山Ｂ地点遺跡　15. 熊野清水山古墳群

16. 渦田山南古墳群　17. 渦田山北古墳　18. 大日向古墓　19. 熊野遺跡

20. 大唱山古墳群　21. 田尻山古墳群　22. 狐塚古墳群　23. 大原北古墳群

24. 甲山古墳　25. 亀井尻瓦窯跡　26. 大成遺跡　27. 旧寺古墳群

28. 御神田山遺跡　29. 須久母塚古墳　30. 瓢山古墳群　31. 永宗遺跡

32. 小和田遺跡　33. 西山遺跡　34. 和田原遺跡

註

（1） 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「小和田遺跡」『西山・小和田・永宗』 昭和57（1982）年

（2） 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第63集 昭和62（1987）年

（3） 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『和田原遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第68集 昭和63（1988）年

（4） 広島県教育委員会「大原1号遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（1） 昭和53（1978）年

（5） 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「西山遺跡」『西山・小和田・永宗』 昭和57（1982）年

（6） 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『隠地上組遺跡』 昭和59（1984）年

（7） 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『戸の丸山製鉄遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第62集 昭和62（1987）年

（8） 広島県教育委員会「田尻山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（1） 昭和53（1978）年

（9） 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「永宗遺跡」『西山・小和田・永宗』 昭和57（1982）年

（10） 大成遺跡調査団『庄原市大成遺跡の発掘調査』 昭和61（1986）年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『大成遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第82集 平成元（1989）年

（11） 潮見 浩「広島県庄原市鍬寄遺跡の調査」『私たちの考古学』17 昭和33（1958）年

（12） 広島県教育委員会「牛乗遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 昭和53(1978)年

（13） 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『境ケ谷遺跡群』 昭和58（1983）年

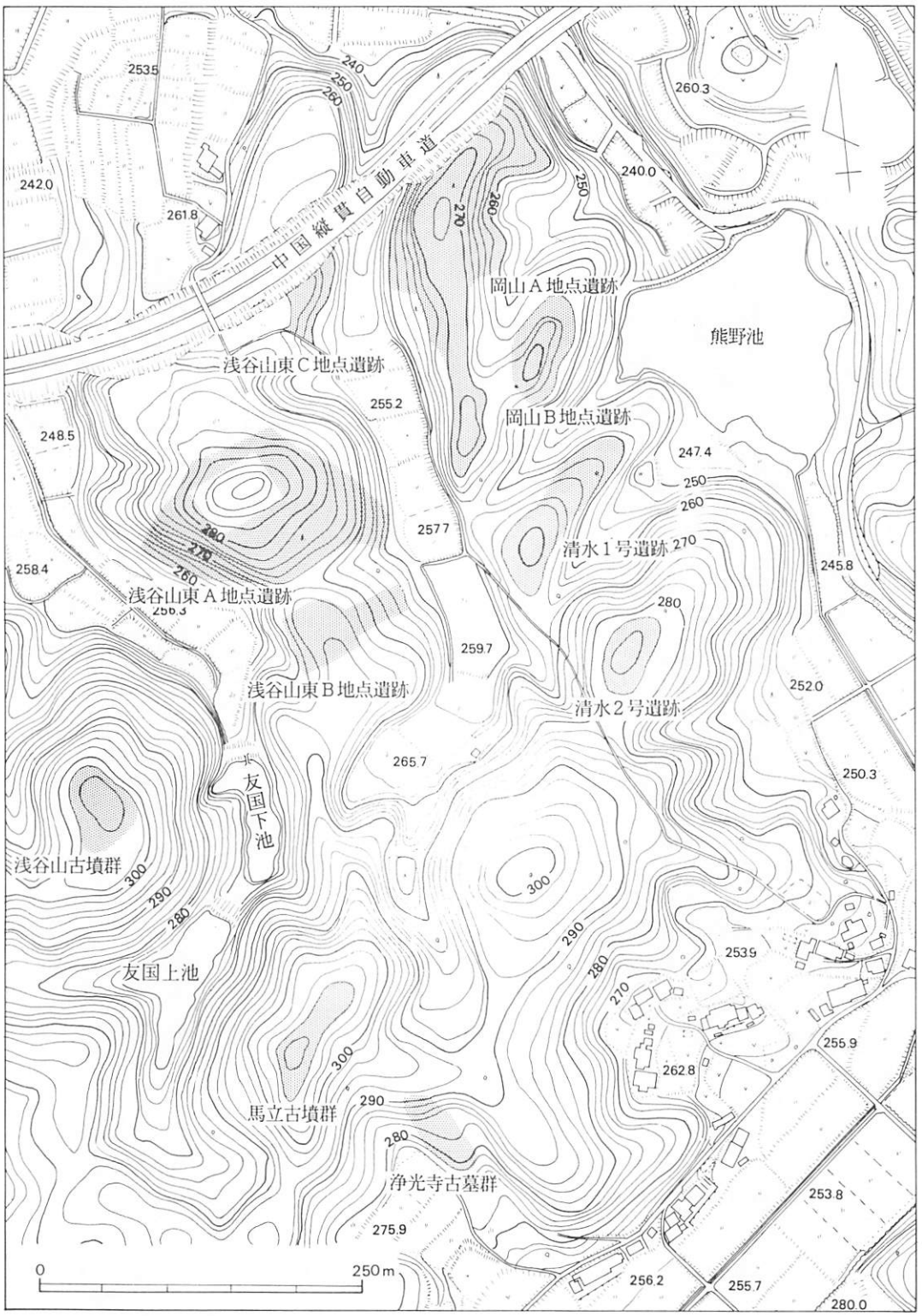
（14） 広島大学文学部考古学研究室『広島県庄原市掛田町旧寺古墳群測量報告』 昭和58（1983）年

（15） 田又仁美・吉本由起「庄原市甲山古墳測量実習，無事?! 終了」『続トレンチ』第4巻第1号 昭和55（1980）年

（16） 高橋彰子「庄原市矢崎古墳測量実習報告」『続トレンチ』第6巻第4号 昭和61（1986）年

（17） 広島県教育委員会「月貞寺古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（1） 昭和53（1978）年

第 2 図　国営備北丘陵公園予定地内遺跡分布図（1：10,000）



第 3 図 遺跡周辺地形図 (1：5,000)

(18) 広島県教育委員会「発展古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 昭和53(1978)年

(19) 広島県教育委員会「国重第1号古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 昭和53(1978)年

(20) 広島県教育委員会「篠津原遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 昭和53(1978)年

(21) 広島県教育委員会「大唱山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 昭和53(1978)年

(22) 潮見 浩・楳 博自「広島県亀井尻瓦窯址の発掘調査」『1965年広島史学研究大会プログラム』 昭和40(1965)年

(23) 庄原市文化財保護委員会「山内首藤氏の支城・雲井城について」『要害山・篠津原遺跡調査報告書』 昭和53(1978)年

表 新たに確認した国営備北丘陵公園予定地内遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	内容	面積
1	浅谷山東A地点遺跡	庄原市七塚町	弥生～古墳時代	集落跡	約10,600㎡
2	浅谷山東B地点遺跡	庄原市七塚町	古墳時代	集落跡	約 2,500㎡
3	浅谷山東C地点遺跡	庄原市七塚町	古墳時代	集落跡	約 700㎡
4	岡山A地点遺跡	庄原市上原町	古墳時代	集落跡	約16,000㎡
5	岡山B地点遺跡	庄原市上原町	古墳時代	墳墓	約 1,600㎡
6	清水1号遺跡	庄原市上原町	弥生～古墳時代	集落跡	約 4,500㎡
7	清水2号遺跡	庄原市上原町	古墳時代	集落跡	約 3,000㎡
8	北山A地点遺跡	庄原市上原町	古墳時代	集落跡	約 1,500㎡
9	北山B地点遺跡	庄原市上原町	古墳時代	集落跡	約 1,500㎡

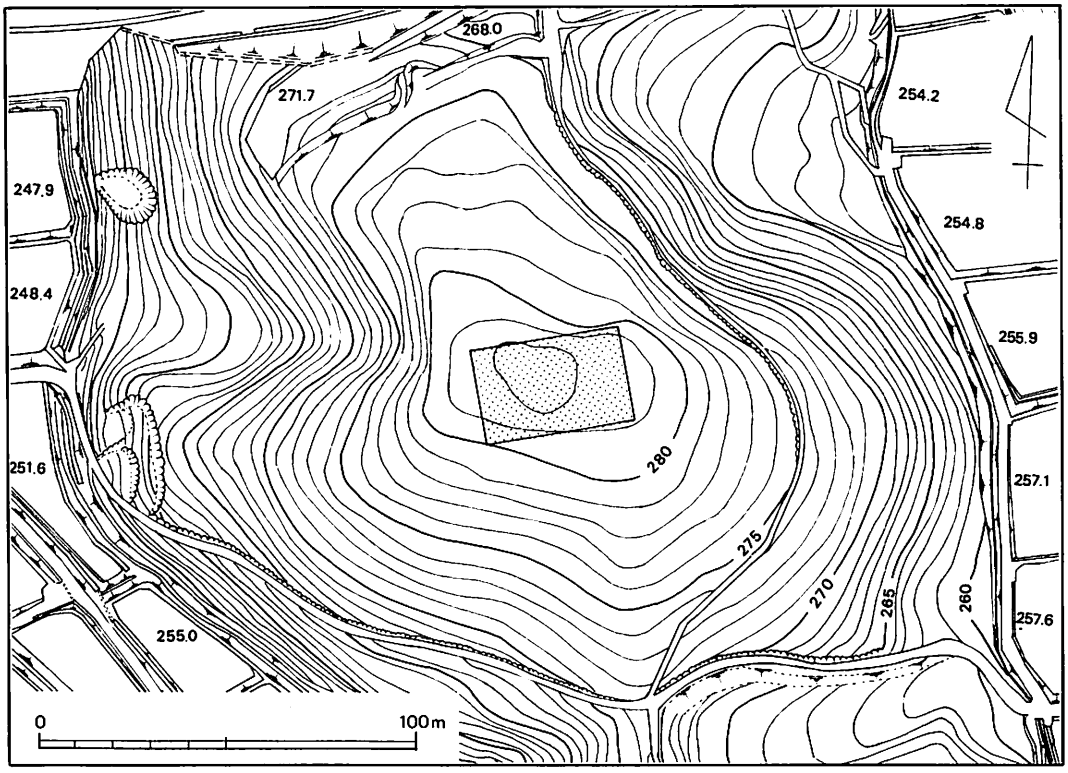
※ 平成2年3月31日現在

第Ⅲ章　調査の概要

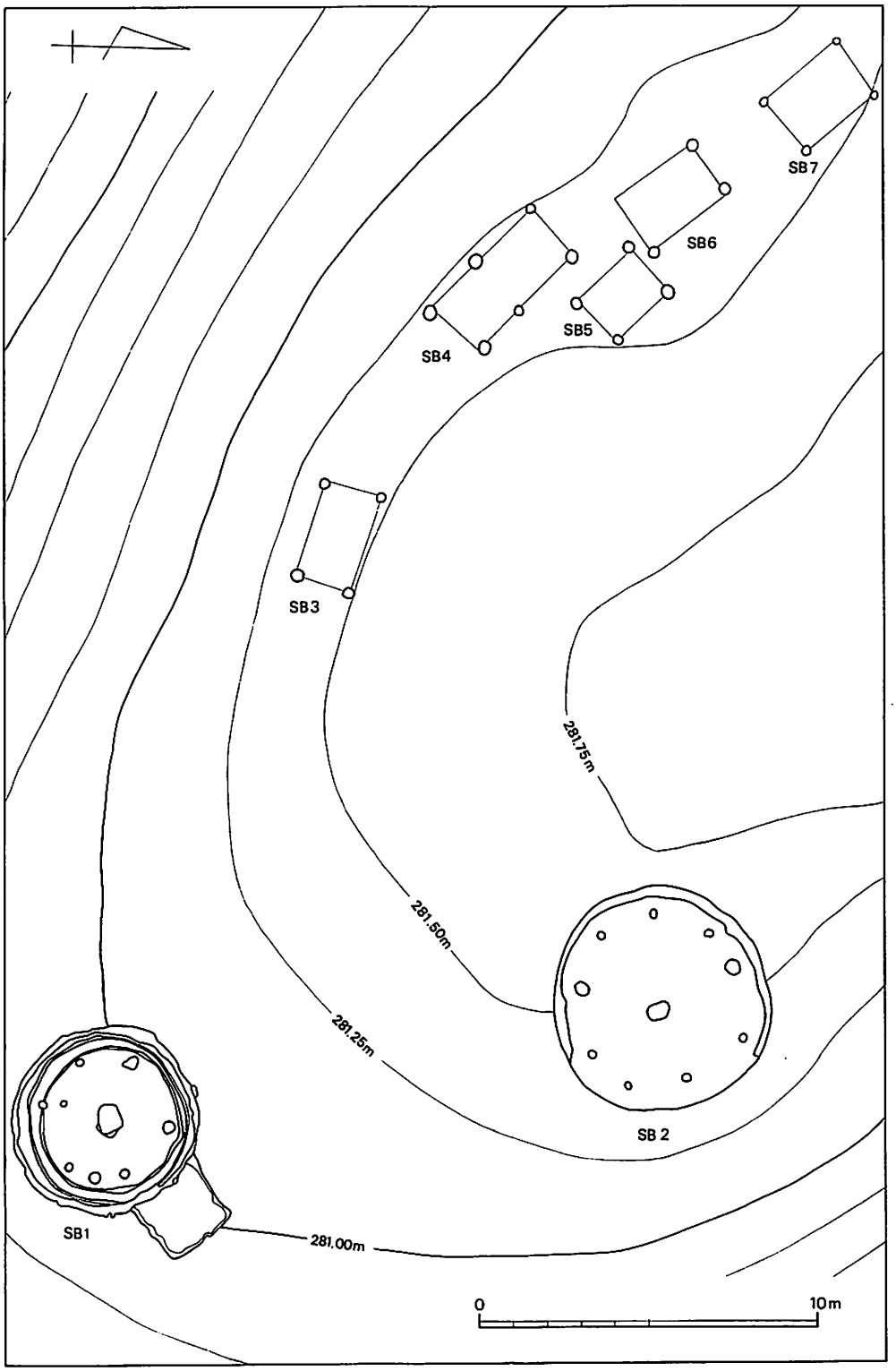
本遺跡は，ＪＲ芸備線七塚駅の南東約800mに位置する，標高約280mの低丘陵上にあり，丘陵頂部から東西斜面にかけて立地する。周辺の谷水田との比高差は20mである。

今回の調査で検出した遺構は，弥生時代後期の竪穴住居跡２軒（ＳＢ１・2）・掘立柱建物跡５棟（ＳＢ３～7）である。

ＳＢ１は，平面形が円形で，規模は径約5.6m，北東側には方形突出部を持つ。また，同一の炉と床面を使用して２回の建て替えが行われている。柱穴の総数は８個で，４本柱から６本柱構造の竪穴住居跡に建て替えられたと思われる。ＳＢ２は，平面形が円形で径約6.4mの規模を持つ。柱穴は９個で比較的大きな竪穴住居跡である。ＳＢ３～7は，１間×１間（ＳＢ３・5～7）と２間×１間（ＳＢ４）の規模の掘立柱建物跡である。いずれの掘立柱建物跡も，南東から北西に向かう同一斜面の傾斜変換線上にある。遺物は，主に竪穴住居跡から出土したが，その多くは流れ込みと考えられる。その内訳は，弥生土器（壺・甕・鉢），土師器（壺・甕），須恵器，鉄器（刀子）である。



第４図　調査区周辺地形図（1：2,000，アミ目は調査区）



第 5 図 遺 構 配 置 図 (1：200)

第Ⅳ章　遺構と遺物

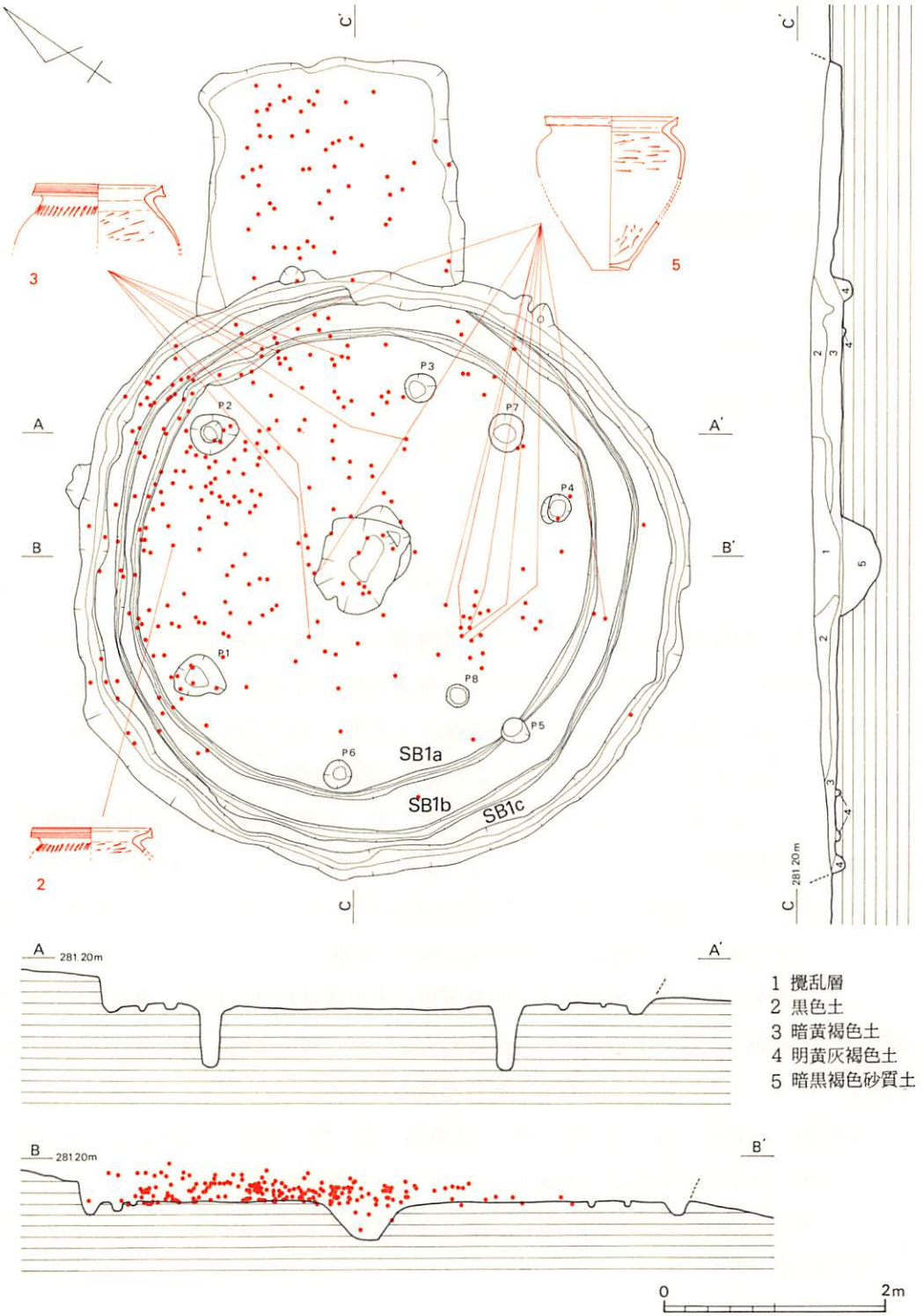
1.　竪穴住居跡

ＳＢ１（第６図・図版３・４）

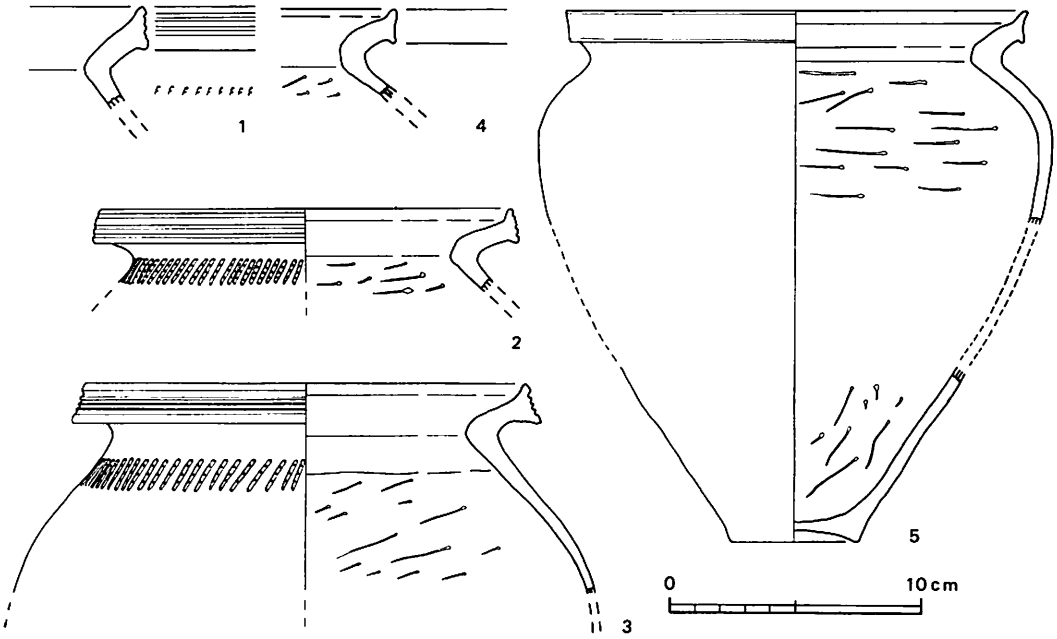
ＳＢ１は，調査区の南東隅に位置し，北へ11mのところにＳＢ２がある。竪穴住居跡の平面形は円形で，規模は径約5.6m，床面積24.6㎡（復元推定）で，北東側には一辺約2mで深さ13cmの方形突出部がある。壁高は北側で30cm，南側は14cmである。溝は壁際に全周するものと，より内側に同心円状に巡る２本の計３本が認められる。床面中央には，65×70cm，深さ38cmの規模を持つ長方形で比較的大型の炉跡がある。炉跡の断面は「U」字形で，その覆土中からは少量であるが炭化物を検出しており，底面からは熱を受けた痕跡がある赤褐色の礫が出土している。炉壁は非常に固く締まっている。柱穴は８個（P1～8）検出した。柱穴の規模は径30～40cm，深さ40～60cmである。以上のように，壁溝や柱穴の状況から，ＳＢ１は同一の炉と床面を使用して２回の建て替えを行った竪穴住居跡と考えられる（内側から順に，ＳＢ１ａ，ＳＢ１ｂ，ＳＢ１ｃとする）。

ＳＢ１ａは，平面形が円形で，径4.2m，床面積13.9㎡（復元推定）の規模であったと考えられる。壁は建て替えのため残存していないが，壁溝は最大幅16cm，深さ6cmである。床面は平坦面を造りだした後に固く踏み締めている。床面の中央には，65×70cm，深さ38cmの大型の炉跡がある。柱穴から４本柱（P1・2・7・8）が考えられる。柱間の距離はP1－2が2.2m，P2－7が2.65m，P7－8が2.4m，P8－1が2.35mである。また，北西側のP1・2と北東側のP7は壁溝との間隔が狭く，P2からP7までの間隔がやや広くなることや，P8がやや内側に位置するようにみられる。

ＳＢ１ｂは，平面形が円形で，径4.6m，床面積16.6㎡（復元推定）の規模であったと考えられる。壁は建て替えのため残存していないが，最大幅15cm，深さ6cmの壁溝が全周しており，北東側はＳＢ１ｃの壁溝に一部切られている。床面はＳＢ１ａの床より径が約40cmほど広く，炉跡については再利用が行われているかどうかは明確でない。柱穴から４本柱（P1・2・7・8かP1・2・5・7）または６本柱（P1～6）と考えられる。柱間の距離は４本柱の場合ＳＢ１ａと同一かP7－5が2.7m，P5－1が2.9mである。柱穴が６本柱の場合P4－5が2.0m，P5－6，P6－1が1.8mである。P2は径10cmほど掘り方が広く，P5は，ＳＢ１ａの壁溝を切っている。また，P4はやや南東よりに位置している。概して，ＳＢ１ｂはＳＢ１ａを北東から北西は20～30cm，南東から南西にかけては40～50cm拡張するとも思われたが，ＳＢ１ａとの先後関係は判然とし難い。



第 6 図 S B 1 実 測 図（1：60）



第 7 図　SB1出土土器実測図（1：3）

ＳＢ１ｃは，規模が径約5.6mの円形で，床面積24.6㎡（復元推定）である。北東側には一辺約2mで深さ13cmの方形突出部がある。壁溝は最大幅40cm，深さ15cmの幅広のものが全周している。床面はＳＢ１ｂの床を北東から北西にかけては30～40cm，南東から南西は40～60cmほど広げており，炉跡もこの時期に若干南東よりに拡張しているのではないかと考えられる。柱穴は6本（P1～6）と考えられ，6本柱構造の竪穴住居跡が想定できる。また，方形突出部についてはＳＢ１ｃを拡張する際に，入り口か物置のような用途をもつ付属施設として併設し，使用していたと考えられる。以上のように，本竪穴住居跡は，2回の建て替えにより概して南西方向に向けて拡張していることがわかる。

本竪穴住居跡の覆土は，黒褐色土～明黄灰褐色土の堆積が見られる。遺物は住居跡内から弥生時代後期の土器を中心として多量に出土したが，覆土上層には古墳時代の遺物が若干含まれることから，流入したものがあると考えられる。

出土遺物は，弥生土器（壺・甕・鉢），土師器（壺・甕・高杯），須恵器などがあるが，いずれも細片のため器形などは明確でない。

本竪穴住居跡の時期は，床面に散在するような状況で多量に出土した土器などから弥生時代後期前葉と考えられる。

遺　物

弥生土器（第7図，図版8）

甕（1～5） 2は口径16.4cm，3は口径17.6cmである。1～5ともに頸部は「く」字状に屈曲し，口縁部を上下に拡張させ端部を丸くおさめる。1～3は口縁部に凹線文を施しており，胴部上半には櫛歯状工具による斜行刺突文を施す。5は口径18.4cm，胴部最大径20.4cm，底径5.0cm，推定器高21.1cmで，最大径を胴部上半に持ちやや肩の張る倒卵形を呈する。器面調整は，2・3は胴部内面にヘラ削りを施し，4は内面がヘラ削りで外面が横ナデで，5は胴部内面上半は横位のヘラ削りを施し，底部はやや縦方向のヘラ削りを施す。色調は淡黄褐色～黒灰褐色で，胎土は2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好である。

ＳＢ２（第８図，図版５）

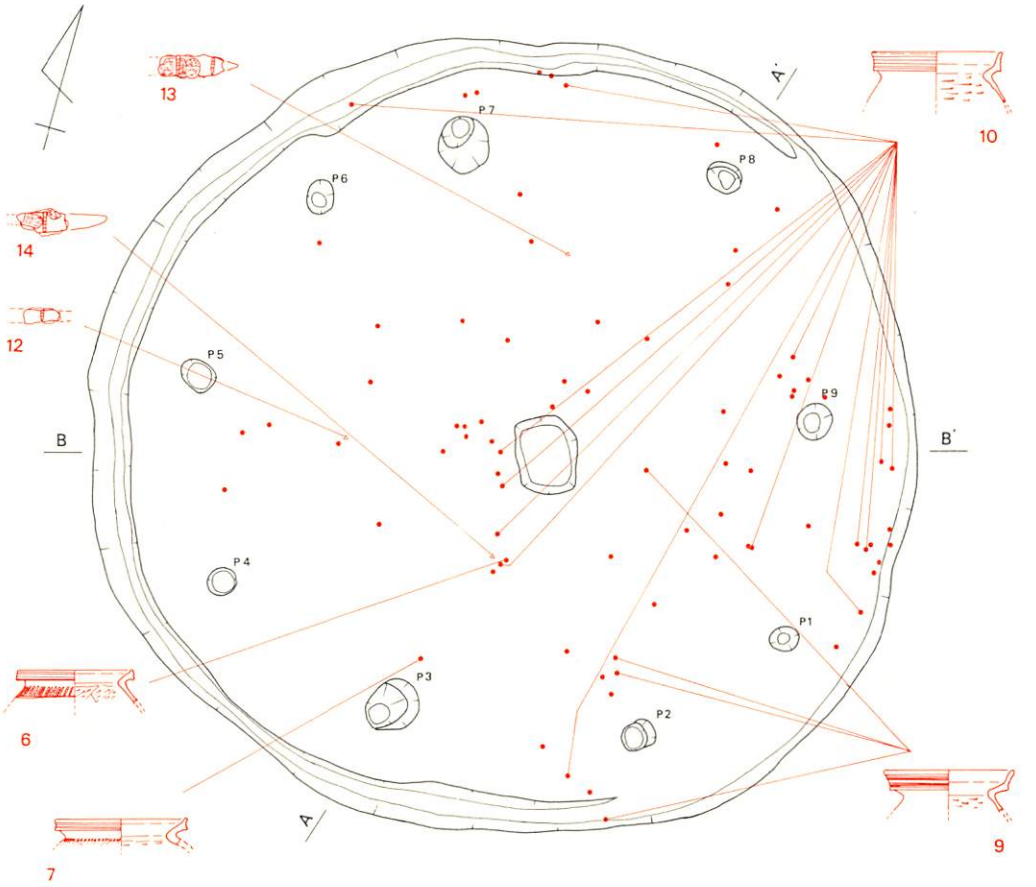
ＳＢ２は，調査区の北東部に位置する。竪穴住居跡の平面形は円形で，規模は径約6.4m，床面積32.2㎡（復元推定）である。壁高は，東側で20cm，西側は24cmである。壁溝は，壁際に幅15～34cm，深さ3～8cmで断面が「U」字形をした溝が全周していたと思われる。床面は地山を垂直に掘り込んで平坦面を造りだし，床は固く踏み締めている。炉跡は床面ほぼ中央にあり，60×40cm，深さ8.0cmと比較的小形である。柱穴は９本（P1～9）で，柱間の距離は1～2mの間隔である。柱穴の規模は径20～30cm，深さ40～60cmである。本竪穴住居跡の覆土は，黒褐色土～明黄褐色土の堆積が見られる。遺物には弥生土器（壺・甕・鉢），土師器（壺・甕），鉄器（刀子）がある。床面直上の出土遺物（9，10）から考えて，本竪穴住居跡の時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

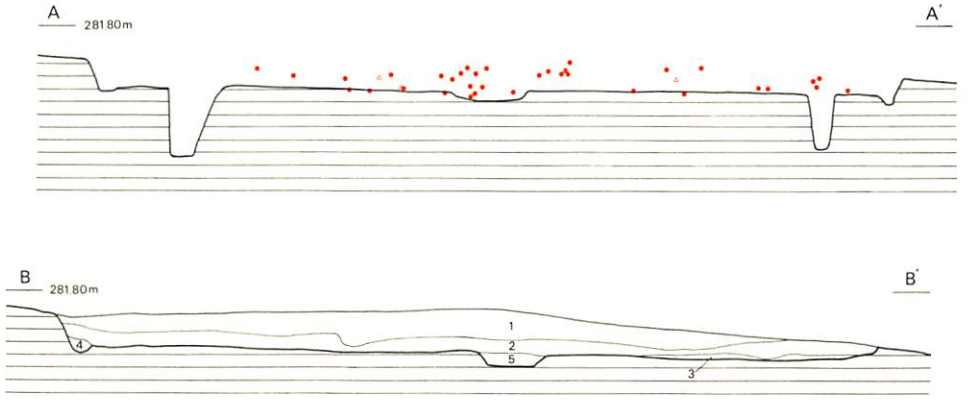
遺　物

弥生土器（第９図，図版８）

甕（6～10） 6は口径14cm，7は口径16.2cm，8は口径26cmである。6～8ともに頸部は「く」字状につよく屈曲し，口縁部を上下に拡張させ端部を丸くおさめる。口縁部に凹線文を施し，胴部上半には，櫛歯状工具による斜行刺突文を施す。6は刺突文の直下に沈線を施している。器面調整は，口縁部が内外面ともに横ナデ，胴部内面にはヘラ削りを施す。色調はいずれも黒褐色で，胎土は2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好である。9は口径15.6cm，10は口径15.9cmである。9・10共に頸部は「く」字状に屈曲し、複合口縁で端部を丸くおさめている。口縁部には擬凹線文を施す。器面調整は内外面ともに横ナデ，胴部内面にヘラ削りを施す。色調はいずれも黄褐色で，胎土は2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好である。

鉢（11） 11は口縁部の小片である。口縁部をほぼ直立させ，端部は若干肥厚し端面はやや凹む。器面調整は内外面ともに横ナデを施す。色調は黒褐色で，胎土は2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好である。

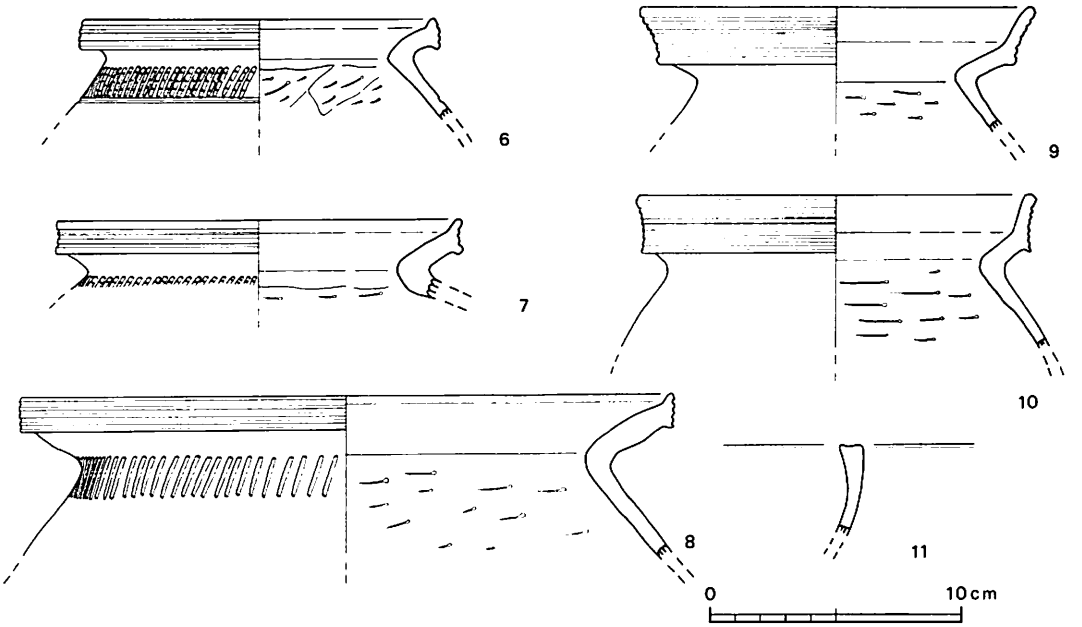




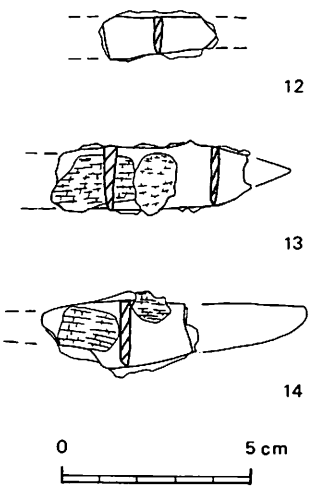
1 黒色土
2 黒褐色土
3 暗黄褐色土
4 明黄灰褐色土
5 暗黒褐色砂質土（炭化物含む）

0 2m

第 8 図 S B 2 実 測 図（1：60）



第 9 図　ＳＢ２出土土器実測図（1：3）



第１０図　ＳＢ２出土鉄器実測図（1：2）

鉄器（第10図，図版8）

刀子（12～14）12は刀身で，刀身先端部と茎尻側を欠失する。現存長3cm，刀身幅1.1cm，茎部幅0.9cm，厚さ0.2cmである。刀身断面はほぼ三角形を呈する。13は刃部先端と茎尻側を欠失する。現存長5.0cm，刃部幅1.6cm，茎部幅1.6cm，刃部厚さ0.2cm，茎部厚さ0.3cmである。断面形は刃部はほぼ三角形で，茎部はほぼ長方形を呈する。茎部には木質が残存する。14は刃部先端と茎尻側を欠失する。現存長4.0cm，茎部幅1.8cm，茎部厚さ0.2cmである。茎部の断面形はほぼ長方形を呈する。茎部には木質が残存する。

2. 掘立柱建物跡

ＳＢ３（第12図，図版６－①）

ＳＢ３は，調査区の中央やや南西寄りに位置する。南東へ14mの所にＳＢ１がある。掘立柱建物跡の規模は1間×1間の小規模なものである。平面形は長方形で桁行の方位はN70°Ｗを指す。柱間の距離はP3－4が2.8m，P2－3が7mである。柱穴の規模は径30～37cm，深さ10～30cmである。覆土は暗黒褐色粘質土

である。遺物は弥生土器の細片が出土した。詳細な時期は不明である。

ＳＢ４（第12図，図版６－②）

ＳＢ４は，調査区の北西寄りに位置する。掘立柱建物跡の規模は2間×1間とやや大形のものである。平面形は長方形で，桁行の方位はN45°Ｗを指す。柱間の距離はP4－5が1.7m，P5－6が2.3mとP5－6間が広くなる。P3－4は1.9mである。柱穴の規模は径25～45cm，深さ7～25cmである。覆土は暗黒褐色粘質土である。遺物は弥生土器・須恵器の細片が出土した。詳細な時期は出土遺物が少ないため不明である。

遺　物

須恵器（第11図，図版8）

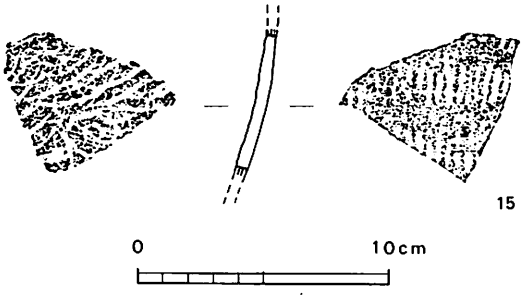
甕（15）P1の覆土中から出土した。甕の胴部と考えられ，内面に青海波文，外面に平行タタキを施しこれを磨り消している。

ＳＢ５（第12図，図版６－②）

ＳＢ５は，調査区の北西寄りに位置する。ＳＢ４とＳＢ６の中間で斜面のやや高位にある。掘立柱建物跡の規模は1間×1間で他の掘立柱建物跡と比較すると小規模なものである。平面形はほぼ正方形で，桁行の方位はN50°Ｗを指す。柱間の距離はP3－4が2.3m，P2－3が1.8mである。柱穴の規模は径30～40cm，深さ15～22cmである。覆土は暗黒褐色粘質土である。詳細な時期は不明である。

ＳＢ６（第12図，図版６－②）

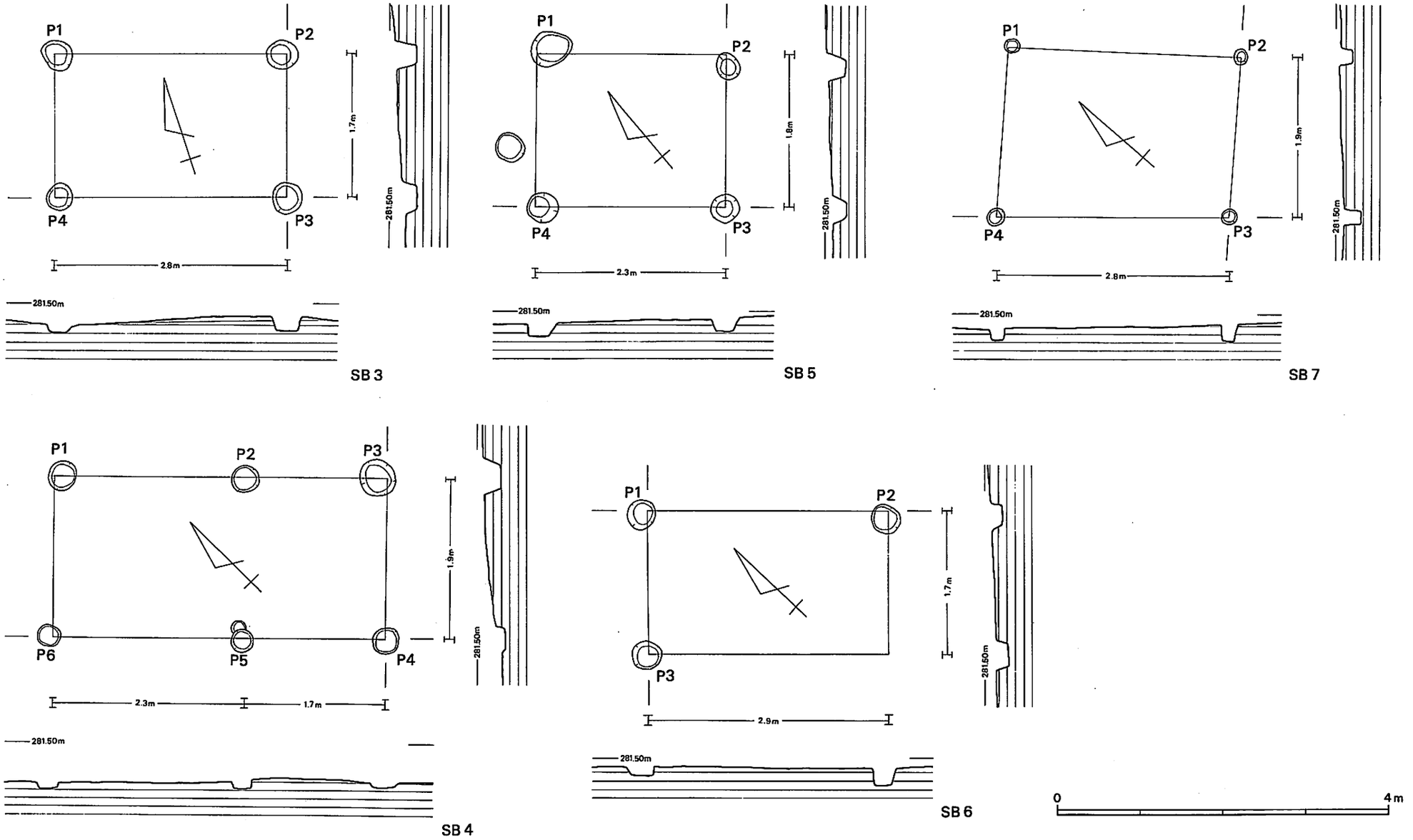
ＳＢ６は，調査区の北西側に位置する。掘立柱建物跡の規模は1間×1間の小規模なものである。桁行の方位はN43°Ｗを指す。柱間の距離はP1－2が2.9m，P1－3が1.7mである。柱穴の規模は径32～35cm，深さ10～20cmである。覆土は暗黒褐色粘質土である。詳細な時期は不明である。



第１１図　ＳＢ４Ｐ１出土土器拓影
（１：３）

ＳＢ７（第12図，図版７－①）

ＳＢ７は，調査区の北西隅に位置する。掘立柱建物跡は1間×1間の小規模なものである。平面形は長方形で，桁行の方位はN40°Ｗを指す。柱間の距離は，P3－4が2.8m，P2－3が1.9mである。柱穴の規模は径19～20cm，深さ14～21cmである。覆土は暗黒褐色粘質土である。遺物は弥生土器の細片が出土している。詳細な時期は不明である。



第12図　SB3～7 実測図（1：60）

第Ⅴ章　おわりに

今回の浅谷山東Ａ地点遺跡の調査では，前章までに述べたとおり遺構は弥生時代後期の竪穴住居跡，時期不明の掘立柱建物跡を検出した。遺物は弥生土器，土師器，須恵器，鉄器が出土している。これらの資料を検討しまとめとする。

遺物について

本遺跡から出土した遺物は，弥生土器（壺・甕・鉢），土師器（壺・甕・高杯），須恵器，鉄器（刀子）などである。弥生土器を中心に土師器，須恵器が若干見られる。土師器，須恵器に関しては細片で器形を窺えるものがなく，遺構内に流れ込んだものと考えられる。次に，竪穴住居跡出土の弥生土器の特徴をあげていくと，ＳＢ１出土の甕は，胴部最大径を中央に持つものと上半にありやや肩の張るものの２つに分かれる。頸部は「く」字状に屈曲し，口縁部を上下に拡張させ，3～4本の凹線文を持ち，胴部上半には櫛歯状工具による刺突文を施す。内面は，頸部直下までヘラ削りを施す。また，口縁部に凹線文を施していないものがある。前者は，庄原市内の新庄町西山遺跡２号住居跡[(1)]や山内町田尻山第1号方形墓[(2)]から出土した弥生土器に類似すると思われるが，西山遺跡2号住居跡（弥生時代後期初頭）の出土土器は凹線文の隆盛期のものと考えられており，田尻山第１号方形墓や高町佐田谷墳墓群[(3)]とＳＢ１出土の土器は若干，凹線文の退化が見られることから西山遺跡の出土土器より後出すると考えられ，その時期は弥生時代後期前葉頃に位置付けられる。

ＳＢ２の床面出土の甕は，複合口縁の口縁部外面に数条の擬凹線文を施し，内面の頸部直下までヘラ削りを施す。この土器と類似するものは七塚町大唱山古墳群[(4)]出土土器（弥生時代後期中葉）があり，複合口縁に櫛歯状工具により凹線を施すことからＳＢ２との時期差はなく，弥生時代後期中葉頃に位置付けられる。

遺構について

今回の調査で検出した遺構は，弥生時代後期の竪穴住居跡２軒（ＳＢ１・2），時期不明の掘立柱建物跡５棟（ＳＢ3～7）である。

ＳＢ1は，同一の炉と床面を使用して2回の建て替えが行われている。ＳＢ1aは，径4.2mで，４本柱（P1・2・7・8）の竪穴住居跡が考えられるが，西・北・東の柱穴（P1・2・7）は壁溝際にあり，壁溝との間隔が狭い。一方，径がやや小さい南側のP8は壁溝との間隔が広くなり，若干内側に寄っていることが指摘できる。このことから，P1・2・7は掘り方を広げた可能性があり，ＳＢ1b・ＳＢ1cにおける再利用が想定できる。ＳＢ1bは，径4.6mで４本柱（P1・2・7・8かP1・2・5・7）または６本柱（P1～6）と考えられる。

また，P5はＳＢ1aの壁溝を切っており，ＳＢ1bの壁溝は北東側で，ＳＢ1cの壁溝に切られている。ＳＢ1aに比べて北東側から北西側は幅20～30cm，南東側から南西側にかけては幅40～50cmの拡張が見られる。ＳＢ1cの平面規模は径約6mで，北東側には一辺約2mで深さ13cmの方形突出部がある。ＳＢ1bの床を幅30～60cmほど広げており，炉跡も若干南東よりに拡張する。6本柱（P1～6）と考えられる。以上のことから本竪穴住居跡の新旧関係を考えると，ＳＢ1a・ＳＢ1bの先後関係は判然としないがＳＢ1aの方が古く，さらにＳＢ1cが一番新しい時期に位置付けられる。これらの竪穴住居跡の時期は出土遺物から弥生時代後期前葉頃と考えられる。

ＳＢ2の平面形は円形である。径約6.4mで中央には小型の炉跡がある。本竪穴住居跡はＳＢ1よりもやや大型の9本柱構造のものである。床面から出土した弥生土器がＳＢ1のものより若干新しく，弥生時代後期中葉頃の時期と考えられる。

掘立柱建物跡（ＳＢ3～7）は，調査区の北西寄りの傾斜変換線上に立地する。平面形はいずれの建物跡も長方形を呈し，ＳＢ4は2間×1間，ＳＢ3・5・7は1間×1間である。ＳＢ6は，柱穴の掘り込みが浅いためか柱穴を1個だけ確認することができなかったが，1間×1間の掘立柱建物跡が想定できる。また，いずれの掘立柱建物跡も覆土中からの出土遺物は少なく詳細な時期は決め難いが，遺構の性格としては作業小屋か物置などの施設を考えておきたい。また，覆土から弥生土器の他に土師器や須恵器が出土していることから東西に広がる斜面上には古墳時代の集落跡も存在する可能性が充分に考えられる。

註

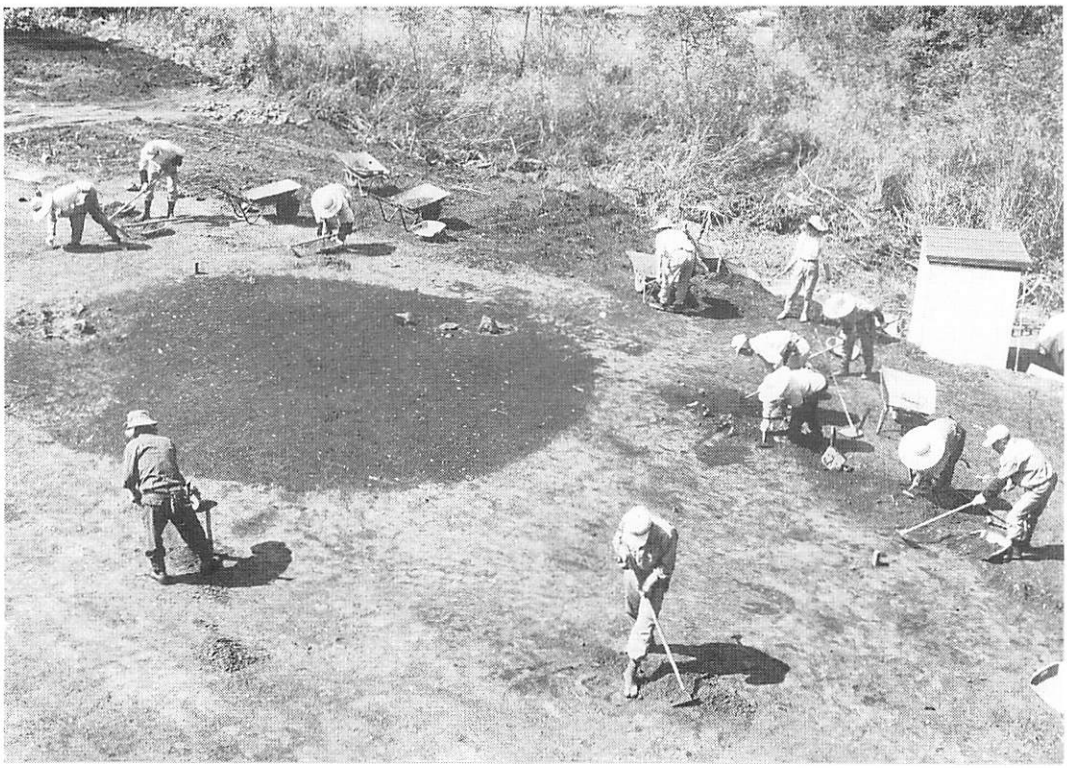
(1) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「西山遺跡」『西山・小和田・永宗』昭和57（1982）年

(2) 広島県教育委員会「田尻山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（1） 昭和53（1978）年

(3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第63集 昭和62（1987）年

(4) 広島県教育委員会「大唱山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（1） 昭和53（1978）年

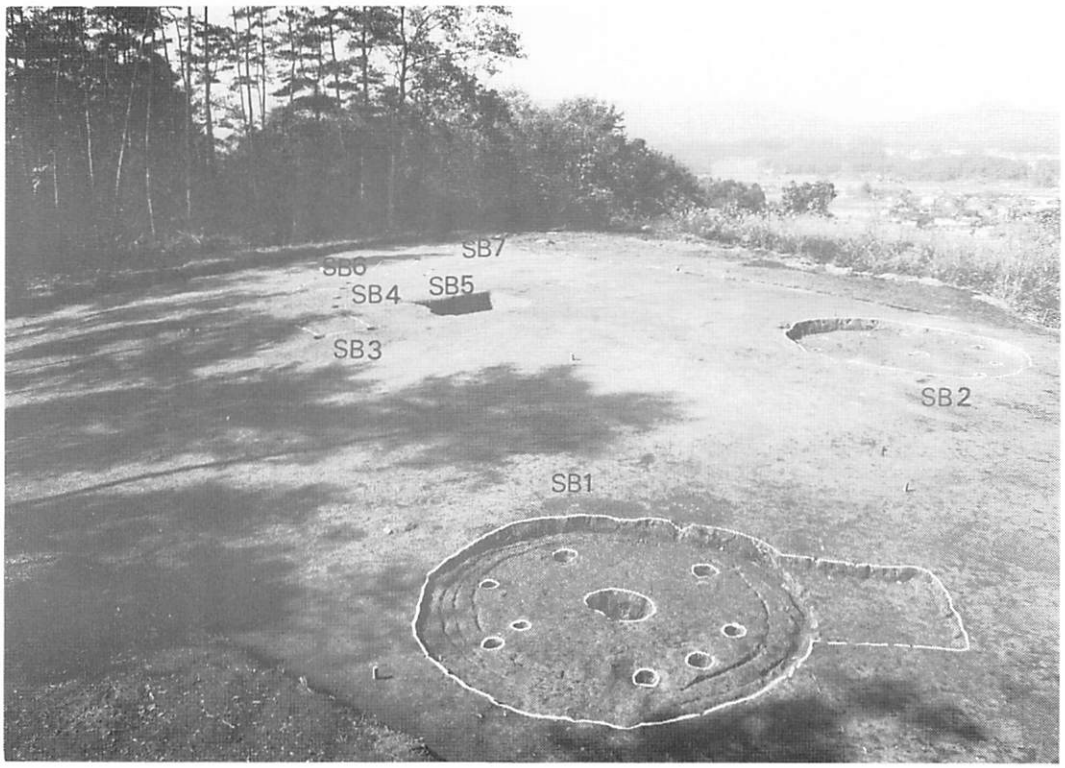
図　　版



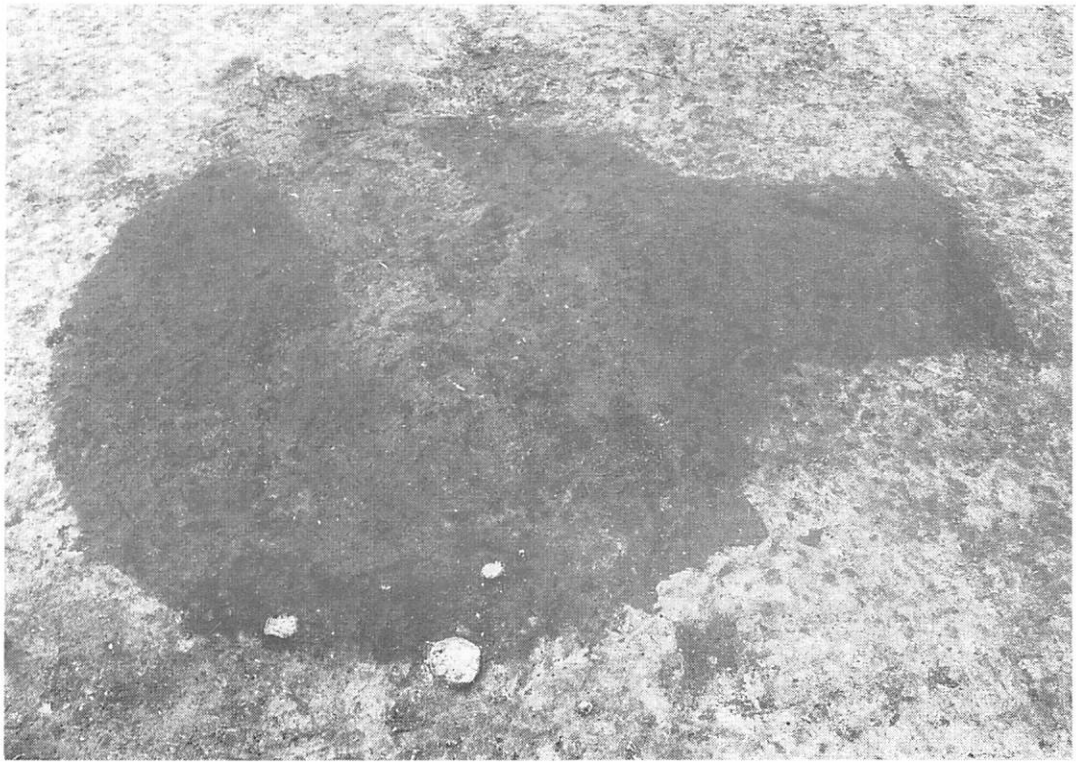
① 遺 跡 遠 景（北から）

② 調 査 前 近 景（東から）

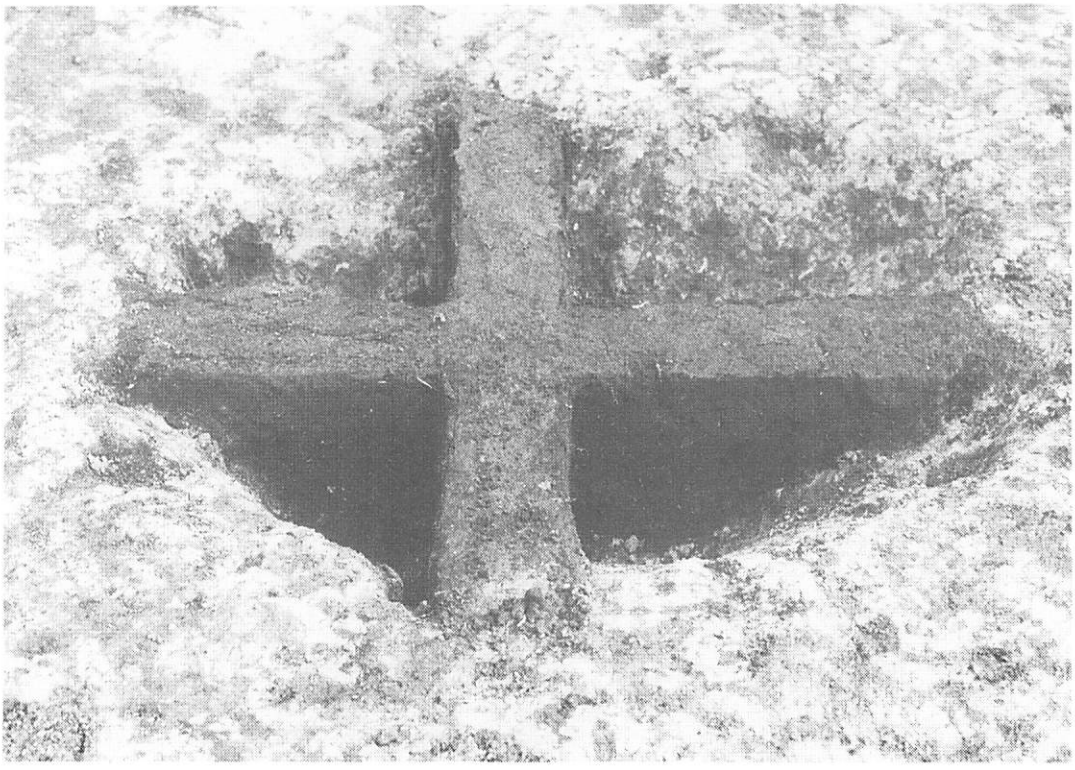
① 調 査 区 全 景（東から）



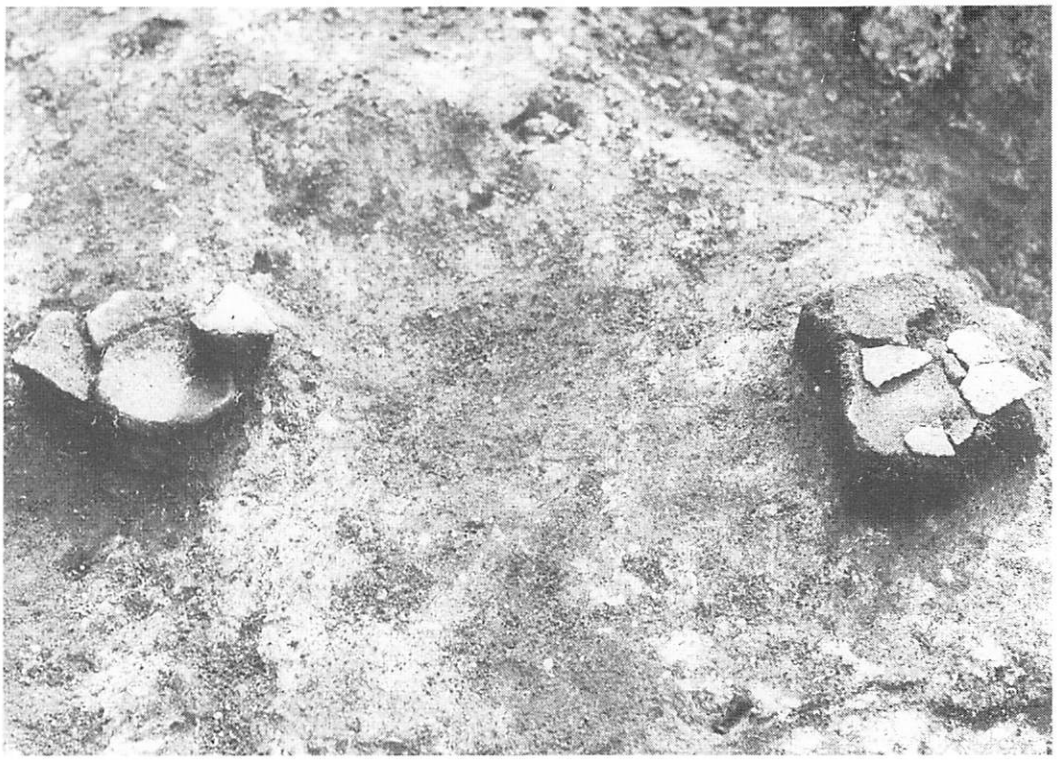
② 同　　上（南東から）



① SB1 調査前（南東から）



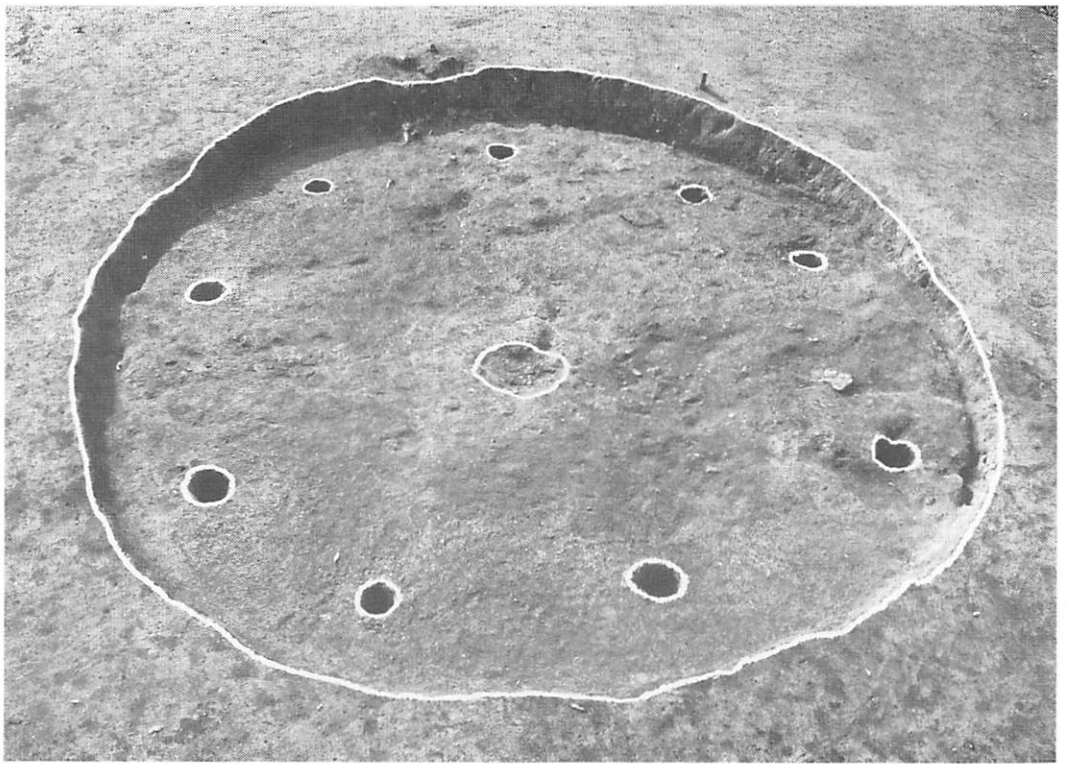
② 同　炉　跡（北西から）



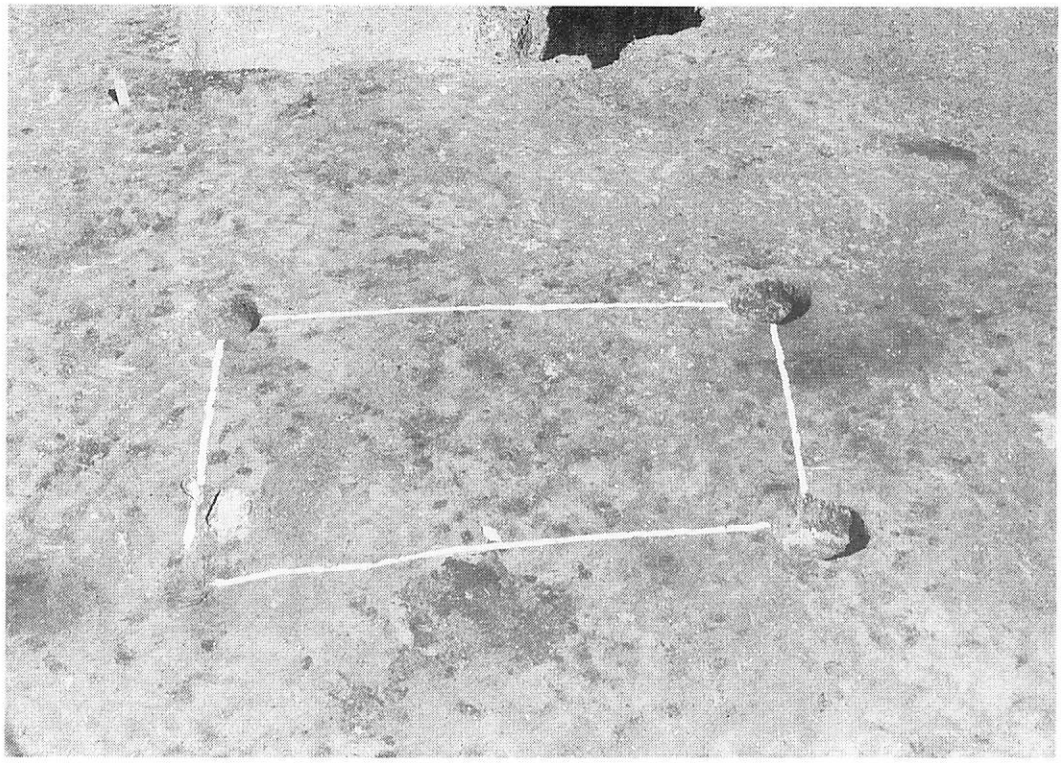
① ＳＢ１遺物出土状況（北東から）

② 同 調 査 後（東から）

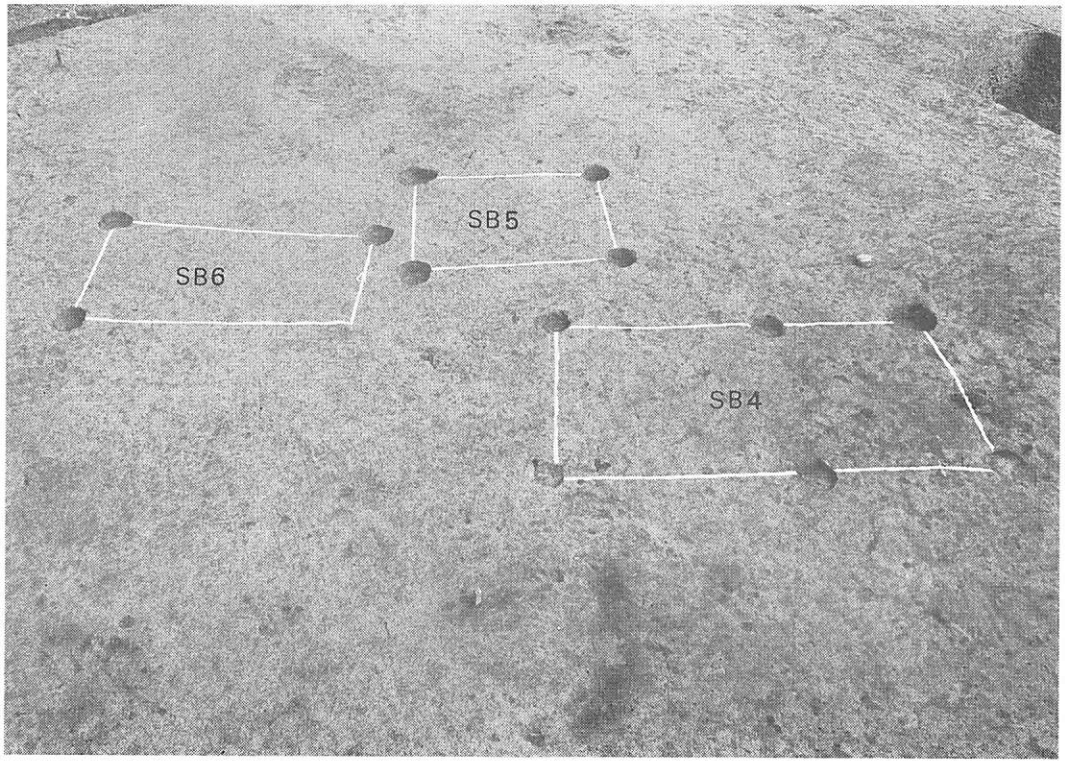
① ＳＢ２ 遺物出土状況（南東から）



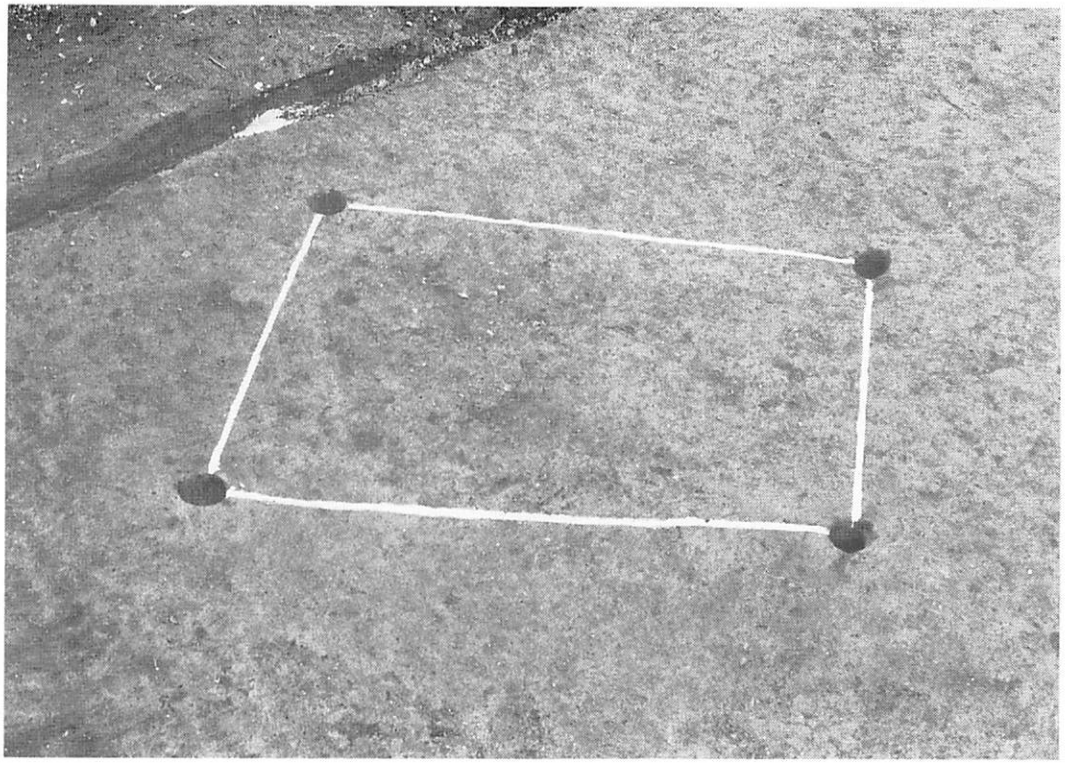
② 同 調 査 後（東から）



① SB3 調査後（南から）

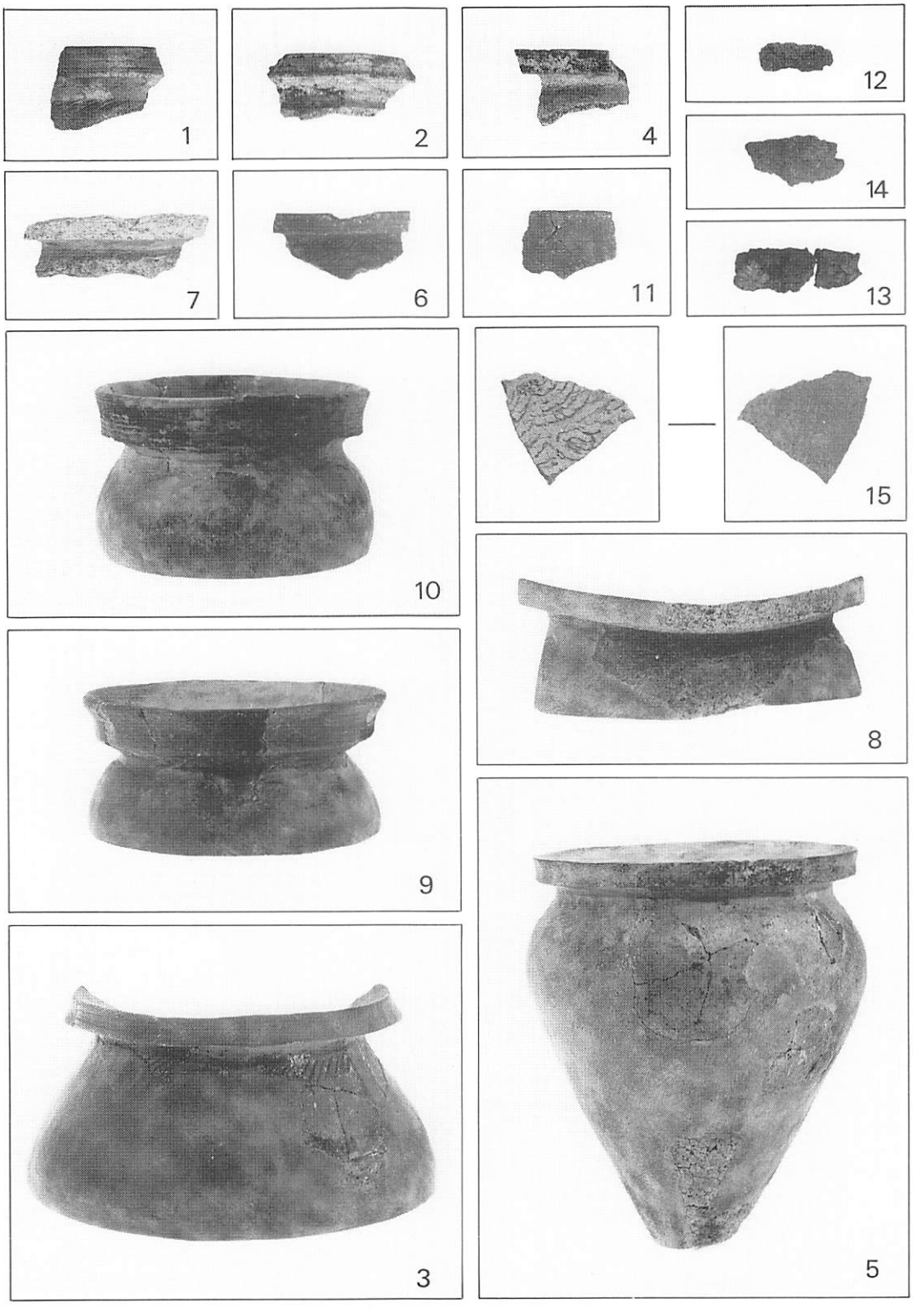


② SB4～6 調査後（南西から）



① SB7 調査後（南西から）

② SB3～7作業風景（南東から）



出 土 遺 物

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書　第85集

浅谷山東A地点遺跡

発行日　平成2（1990）年3月

編集・発行
財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター
〒733 広島市西区観音新町4丁目8－49
TEL（082）295－5751

印刷　朝日精版印刷㈱